

つるの湯っこ

昔々、馬門の山側に小さな家がありました。そこに病気で体を思うように動かせない母と親孝行な樵の息子が住んでいました。

ある日、息子は、いつものように斧をかついで木を切りに出かけました。

どうしたことか今日は、歩いて歩いても切り倒すのにちょうどよい木が見つかりませんでした。

お昼になりお腹がすいたのでおにぎりを食べました。

歩き疲れたのか急に眠くなり眠ってしまいました。

物音で目を覚ますと目の前に立派な牡鹿が立っていました。息子は、斧を取ろうとしましたが、力が抜けてただ牡鹿を睨みつけているだけでした。

牡鹿は、ゆっくりとした足取りで歩き始めました。息子は、牡鹿に誘われるように後をついて行くと急に牡鹿は振り向き駆け去って行ってしまいました。

山にとり残された息子は、不思議な匂いと音を聞きました。音のする方へ近づいて行くと見ると、立ちこめる湯けむりの中で一羽のつるが湯をかけてはしゃがみゆったりと湯につかっています。

しばらくして立ち上がったつるは、大きな羽ばたきをくりかえし体のお湯をはじくと空高く飛び去りました。

息子は、つるの飛び立った後へ近づいて見るとそこは湯だまりでした。けがをしたつるが体を休めていたのでしょうか、岩に少し血の跡が残り、羽根が2、3枚落ちていました。不思議なことに湯だまりの側につるの形をした石が残っていました。

息子は、持っていた手ぬぐいを細く裂いて目印にしながら帰り道を探しました。

日が暮れて家々に明かりがついたころ、やっと母の待っている家にたどりつきました。

さっそく母に、今日の出来事を話しました。

そして、明日は、母を湯だまりに連れていくことにしました。朝早く起きて母を背負い目印を探しながら山の奥へと進んでいきました。不思議な匂いの湯けむりが立ちこめている湯だまりに着きました。母親つるの石を見て

「つるの湯っこだ」

と言って、這いながらその湯に入りました。

「いい湯っこだ」

と言って、曲がっていた手足を伸ばし、動かなかった指先も開いたり握ったりして気持ちよさそうに入っていました。

その後、息子も湯だまりに入りました。疲れがとれて体が温まり気持ちがよくなりました。打ち身、かすり傷や虫刺されもよくなっていました。

つるの湯がとても気持ちがいいので、母と通って、5日も過ぎると母親の病気が治り、一人で歩けるようになっていました。

息子も疲れがとれて、毎日元気に樵の仕事に出かけて行きました。

息子は馬門の人達にも、つるの湯っこのことを教えてあげました。

「つるが見つけた湯っこ、つるの湯っこ、体っこ温まるニシ」

「つるの湯っこのおかげで元気になったニシ」

とみんなに喜ばれました。

優しくて親孝行な息子に神様が牡鹿の姿になって教えてくれた「つるの湯っこ」今は、馬門温泉と呼ばれて、みんなに慕われています。

どっとはらい